

[Chapter: 四…見せましょう! あたしの真価^{ちから}今度こそ!]

肥土は、しかし、すぐに冷静さを取り戻した。

「ちっ…!!」

躊躇わずに回転式機関銃^{ガトリングガン}の残骸を汀に向かって投げる。

汀はこれを一步横に動いて回避。だが、これは罠^{おとり}だ。

肥土はその隙に大型自動拳銃——デザートイーグルを抜く。

どうも、この連中はマグナムが好きらしい。異形化されていれば、反動を抑え易いし、

44マグナムモデルなら、熊よけにも使えるから、北海道では弾薬も補給し易いのだろう。

——でも、無駄なあがきね。

汀も同感だったらしい。

肥土が腕を構える前に、汀が野太刀でその腕を横薙ぎにする。

「ぐうっう!」

「えっ…!」

「…!」

しかし、肥土が痛がった後、あたしは驚き、汀が黙りこむ。

「ふはははは!…: 光武帝曰く『柔能^よく剛を制す!」

肥土は高らかに言う。刃物の直撃を受けたのだ。無傷ではない。しかし、それ以上に、興奮している。

そう、汀の野太刀が折れた。

真つ二つという訳ではない。ただし、無様にひん曲がってしまった。

斬られた肥土はさすがに右腕を抑えているが、大型自動拳銃を手放してはいなかった。いや、骨格の上に筋肉と脂肪が組み合わさったヒトの身体は斬り難いというけど…:

それでも、日本刀が直撃だったんだぞ…: 第一…:

「鉄の塊をすばすば斬れる汀が、何であの男の腕は斬れないのよ!」

あたしは思わず叫んでいたが、汀は落ち着いたものだった。

「…: シージン女史、彼の防弾繊維はあなたのアバーヤも同じものよね?」

「あ、ああ…:」

「なら、確認するわ。あの防弾繊維の防刃性能は、マリオンプランのヴァイタルスーツと同じくダイランシー効果を含んでいるのよね? 非ニュートン流体化されているから、斬撃も通りにくい。しかも、その下には結晶性の装甲があるのでないかしら?」

「あっ、ああ。その通りだ。その防弾繊維の下にあるのは、アタシと違って装甲特化した異形細胞による外骨格だ」

「そう……。なら、今の刃筋とは相性が悪いわけだわ」

汀はあっさり納得した。

実際、そういう事なのかもしれない。例えば、大口径低速弾と小口径高速弾では性質が異なる。だから、同じ防弾装備に発砲した時、小口径高速弾なら貫けるにもかかわらず、運動エネルギーに勝る大口径低速弾が防がれるという事もある。

それと似ている。単純な強度以外の理由で、今の汀の刃筋では肥土を斬れない。

あたしはFN・P90の5・7×28ミリ弾で肥土を撃つ事を考え始めた。

それでなくとも、一对三だ。まだまだ、こちらの有利……

——ちよ、やばい。増援が来る!!

大量の異形の反応にあたしは気付いた。

あたしが内心焦りつつ、顔色に出さないようにしていると、汀は野太刀を右手で水平に構えた。そして、奇妙な事を言い出す。

「だから、刃筋を変えるわ」

「はあ？」

あたしは一瞬、あの野太刀を『元の鞘に戻す』のかと思った。

日本刀は芯を軟鋼で作り、その周りを硬鋼で囲む二重構造らしい。このように造られた刀身は薄く細くしなやかであるだけではない。物理的粘性による『復元』が期待できる。

だから、多少ひん曲がったとしても、時間をおけば、『元の鞘に戻す』事もできるという。

しかし、汀は野太刀の刃に左手の指を這わせた。

当然、出血する。が、それはにじみ出る前に、刀身に吸われていった。

「え……」

そこであたしもその野太刀が鉄製ではない事に気付いた。

汀が細い指を横滑りさせると共に、刀身が仄かに輝き、ひん曲がったところがみるみる

真っ直ぐになっていく。

物理的粘性による『復元』ではない。明らかに生化学的な『回復』だった。

いや、それにしても早過ぎる……!

「その野太刀、もしかして、結晶細胞? ううん、その再生の速さは異形細胞?」

「いいえ、『精霊結晶』よ。銘を『稲剪』^{イナギリ}と言うわ」

汀の指が切っ先にまで届いたころには、その野太刀『稲剪』^{イナギリ}は元の姿を取り戻していた。

いや、蛍の様な発光現象だけが続いている……!

「意味がわからん!」

あたしもシージンも肥土も、三者三様に驚愕していた。そりやそうだろう。たしかに、異常に長く奇妙に斬れるとは思っていたが、汀の野太刀はあくまでも日本刀の範疇だった。だが、その刃が突然オカルトじみた『光の剣』になりやがったのだ。

しかも、汀はドヤ顔で言う。

「我が『稲剪』^{イナキリ}は人の想いに応える——言わば、神剣。いいえ、神刀というべきかしら?」
「知るか!」

肥土は大型自動拳銃を汀に向ける。

だが、汀の腕前を知るあたしにすれば、その選択は無謀だった。
構え、狙い、引き金を絞るよりも、汀の一太刀ははるかに速い。

再びの横薙ぎ。

「ぎゃああああああ」

肥土は伸ばした右腕を斬られて絶叫した。丸太の様な異形の腕が自動拳銃ごとボトリと落ちる。

汀は淡々と言う。

「ちなみに『柔能制剛』^{柔能く剛を制す}の出典はたしかに光武帝による【三略】の引用と言われるけど、【三略】の成立過程は胡散臭すぎるわ。個人的には【老子】の『柔弱勝剛強』^{柔弱は剛強に勝つ}が由来ではないかと勘繰っているわ」

「いや、それはどうでもいいって……」

「ふ……この奥の手を見せる事になるとは思ってたわ」
……どうも、汀は汀で焦っていたらしい。

いや、それより……。

「来た」あたしは仕方なく言う。「異形の援軍よ。数も多い」

「ここまで、近づけば、アタシにもわかるさ」

「でしょうね」

あたしは頷き、FN・P90の銃口を、蹲る肥土に向ける。

しかし、汀はその射線を謎の野太刀『稲剪』^{イナキリ}で遮った。

「この男は既に戦闘力を喪失しているわ」

「だから、殺しておくべきでしょう。敵主力と合流される前に」

「だから、生かしておくべきなのよ。敵主力の足手まといにさせるために」

汀はあくまでも戦術論で語った。しかし、あたしはその裏にある汀の優しさという名の甘さを勘繰る。

「ちっ」

あたしは思わず舌打ちする。

森の奥から、異形が大量に出てきたのだ。

しかも、その竜盤型と蜥蜴型の異形の群れは、明らかにこれまでより一桁数が多い。

「どう思う？」

「……現有戦力であれだけの異形を相手にするのは無理だ」シージンは冷静に判断する。

「ある程度、戦力を削ぐ事は出来ても、最終的には撤退するしかないだろうな」

「でしょうね。その機タイミングについてだけど、汀はどう思う？」

「……」

「汀？」

「いえ、敵意はない？……でも、あの竜盤型は……」

汀は眉を顰めながら、奇妙な事を言っていた。あたしが問い返そうとする前に、

「阿久津……？」

と、シージンが声を上げた。

そう、実際、異形の群れの中にはあの阿久津がいた。

……というより、阿久津がその異形の群れを率いているのだろう。

「おお、阿久津か……」

肥土は顔色を変えて、阿久津に駆け寄り。あたしは発砲を考えたが、背中防弾繊維+異形細胞越しに貫けるかどうかは怪しいし、汀との関係悪化も怖い。

「肥土さん……」

「お前が来たという事は異形部隊の編成も整ったって事だな？」

「ええ、まあ」

実際、その数は少なく見積もっても数十を超えている。いや、見積もってといっても、北海道の山中の話だ。視界は木々で遮られ、文字通りの見積もりには自ずと限りがある。

自然、あたしの『直感』頼りになるが……

ええい、ぶっちゃけよう。把握しきれない程の異形が周りを取り囲みつつある。

肥土はそれをわかっているらしい。その顔には狂喜の笑みが浮かぶ。

「よし、これで我々の勝ちだな。見ている、あいつら、女に生まれた事を後悔するぐらい、ズタズタに犯してやる……」

その言葉に、阿久津は眉を顰めた。

「女って……アネさんも、ですか？」

「ああ！ シージンは裏切った！」

「そうですか……では『イースターエッグ、種別…コード E エクスターミネート、目標…ターゲット 肥土』」

次の瞬間、異形の爪が肥土の腹を貫いた。

何匹もの蜥蜴型異形が阿久津の言葉に従い、肥土を束になって襲ったのだ。

「阿久津っ……?」

肥土の防御力・耐久力は凄まじい。何しろ、大柄な体躯を異形細胞で強化し、さらには防弾繊維で覆っているからだ。所詮は自律式の蜥蜴擬きでは瞬殺とはいかなかった。

「どういうっ! つもりだっ! ?」

だから、肥土は必死の抵抗で蜥蜴擬きをまず一匹殴り殺し、二匹目も殴り殺した。汀に片手を切り落とされ、不意打ちで腹部にも重傷を負っている身である。健闘とっていい。しかし、自律式異形は次から次へと肥土に襲いかかる。

結局……それは苦痛を長引かせるだけだったかもしれない。

「肥土さん、すみません。俺、もう、あんたらについていけません」

「貴様ああっ……!!!!!!」

そして、異形の男は三匹目を殴り殺すため、腕を振り上げ、その動きを止める。

肥土は死んだ。その証に異形細胞の部分だけが【融解】していく。

残ったのは肉体の所々と右腕が綺麗に欠落した男の死体だった。

シージンはそこに己の末路を見たのだろうか?

苦虫を噛み潰したような顔を見せた後、ぽつりと言う。

「……阿久津、それがお前の選択なんだな?」

「はい。【紅玉の杏】あんずは怖いですが、アネさんを敵にするよりはマシです」

「ふ、そうか……」

シージンは歪んではいるが、はつきりとした笑みを見せる。

……あー、こいつら、結局、相思相愛ってわけ?

あたしは砂糖を吐きたい気分になる。

しかし、汀は別だったらしい。

「キャロット! あの異形を撃ちなさい!」

「え?」

「右前方、三十歩の竜盤型よ! 早く!!」

あたしは瞬時に、構え、狙い、FN・P90の引き金を絞った。

しかし、5・7×28ミリ弾が竜盤型に致命傷を当たる事はなかった。

突如、竜盤型の体内から、触手が飛び出し、銃弾の多くを防いだからだ。

あ、あれ……？ 竜盤型にあんな機能あったっけ……？

「あ、阿久津っ!？」

「あ、あの竜盤型、おかしいです! こちらの命令を受け付けません!!」

シージンが阿久津に尋ね、阿久津がシージンに答えた。そして……、

「あの異形、中に何かいるわ」

汀が指摘する。いや実際、竜盤型異形そのものが縦に割れた。

異形細胞の中に隠れていたのは……

そう、【紅玉の杏^{あんず}】だった。

「やっぱり、中に入っていると異形の体液で濡れちゃいますね。そうそう御存知ですか？ 異形の体液って、粘性が高いんですよ」

杏はのんきな声で言ったが、以前の様な柔和な印象は何故かなかった。

昨日と同じ、ビジネススーツとミニスカート。ただし、黒ぶちの眼鏡は外し、お下げはほどき、濡れて真っ直ぐになった黒髪を背中まで伸ばし、胸元は大きく開けている。

「だから、ほら。私なんてもうネバネバのベトベトです」

そして、杏は左右の乳房を自身の両手で、揉んで揺らして持ち上げて見せる。

豊かな胸の谷間で、粘液がねちゃりねちゃり糸を引く——そして、二つ名の由来である紅玉が、相も変わらず輝いている。

元々、ビジネススーツはわりとぴっちりな^{タイト}つくりだし、ミニスカートは生足が出ている。それが粘液で濡れて、杏の魅惑的な肢体が引き立っている。当人も胸の豊かさを強調するべく、腰をかがめ、尻を持ち上げているから尚の事だ。

にもかかわらず、あたしは素直に喜べなかった。

淫らな杏の背から、異形の触手が悪魔の翼のごとく無数に伸びていたからだ(よくよく見ると、触手は服を突き破っており、胸元が開いているのはそのためもあるようだ)。

アレが銃弾を防ぎ、竜盤型異形を内側からとはいえ、真っ二つにした事を考えれば……、まずシージンが口を開き、阿久津がそれに続く。

「あ、阿久津!」

「い、イースターエツ……」

だが、次の瞬間、杏の触手が阿久津の首に巻き付いた。

「かはっ……！」

そして、阿久津はそのまま締め上げられる。

しかも、命令コマンドを言い終える前なので、自律式異形も杏への攻撃が開始できない。いや、一応、異形部隊も使役者である阿久津を守ろうと動くのだが……、

「うーん、これが女の子なら、色々とお楽しみなんですけどねえ」

杏はそう言って、これ見よがしに触手で阿久津を自分の傍に寄せる。

こうなると、異形部隊は阿久津を傷付ける恐れから動けない。

勿論、あたしたち人間——特にシージンにとっての人質にもなっている。

というか、今の動き……。

「あの触手、あそこまで制御できるものなの……!？」

一応、異形細胞にも一定の判断能力はある。だが、それは節足動物の梯子状神経程度のもので、単体で複雑な判断はできない。だから、人間の側が制御する必要がある。しかし、そうすると、人間の側にも異形細胞に対応した運動野が必要になる。いや、この場合なら、感覚野も、だ。

例えば、今、杏が触手で阿久津の首をしめ上げ、自分の傍に引き寄せた。

つまり、杏の脳には『長い触手で何かを締め上げる』ための神経系が出来上がっているのだ。ヒトには本来存在しない、文字通りの『異形』を操るための運動野が存在しているのだ。

次に、杏は触手で阿久津を自分の傍へと引き寄せた。あの時、よく見ると、他の触手を地面に何本も打ち込み、杏自身の身体を固定していた。考えてみれば、当然の話だ。杏と阿久津の体重は性差を考えれば、阿久津の方が重いはず。単に二人の身体を触手で繋いで収縮運動させるだけでは、杏の方が引つ張られてしまう(重いモノ程は動きにくいという慣性の法則だ)。だから、阿久津を引き寄せるためには、まず、杏自身の身体を地面へと固定する必要がある。

いや、こういった予備動作を自然に出来るだけでも恐ろしいのだが……。

重要なのは、杏は触手で自分を大地にちゃんと固定できたという事だ。こういう作業をするためには異形細胞からの感覚の還元フィードバックが不可欠だ。考えて欲しい。何かに掴まる時、掴まる何かの感触などの情報は不可欠だ。ソレがどんな形で、どの辺りがどれくらい脆いか——それらの感覚情報なしに『掴まる』という動作は不可能だからだ。つまり、杏には異形の触手に対応した感覚野も存在している事になる。

あたしも人の事は言えないが……

「あんた…：本当にヒトなの？」

「こうみえても医者ですからね。IGFTELも使い放題なんですよ」

IGFTEL——インシュリン類似成長因子三型内因性リガンド——現在主流となっている神経系初期化剤を大量服用している事を杏は匂わせた。

「化け物…：」

汀ですら、そう呟いた。

かつての甲冑式異形もヒトから極端にかけ離れた形状は取らなかった。シージンの様な融合式異形被験者もそうだ。理由は言うまでもないだろう。人間の脳とは人間の体に最適化されているからだ。

たしかにIGFTEL等を使えば、脳神経系を【初期化】^{フォーマット}する事で、幼児の様な脳神経系の可塑性を取り戻せる。後は既存の肉体的リハビリの応用だ。こういった神経系初期化剤投与技術の確立により、全身をくまなく覆う異形細胞の甲冑で、四肢を延長したり、新規に増設したりしても、それらを自在に動かせるようになった…：とはいっても、やはり、限度というものがある。

極端な『人外器官』の増設と制御には、当然、それだけの【初期化】^{フォーマット}領域を必要とする。必然として、それは人間の心身を著しく蝕む。

しかし、【紅玉の杏】^{あんず}はそれをやった。そして、蠢く数多の触手を操る力を得たのだ。もはや彼女は『部分甲冑式異形使役者』と『融合式異形被験者』を統合した『部分融合甲冑式異形使役者』という領域にあるのかもしれない。

「さて…：時間稼ぎはもう十分でしょう」

「かはっ」

阿久津が苦しみ悶え出した。異形の触手はその首をさらに強く締め上げたのだ。

「あ、阿久津を放せ！」

「なら、例のモノを渡すことです」

触手の何本かが阿久津の右脚に巻き付き…：そのまま力づくで折った。

「ぎゃあああああ」

当然、阿久津は絶叫した。しかし、

「うるさいですねえ。こんな目に会いたくなかったら、大人しくしていればよかったのに」と、杏は不愉快そうに吐き捨てる。

「もしかして、阿久津君的にはシージンちゃんに一生ついていきたかったとかですか？ たしかに、シージンちゃんって、童貞君にモテそうですねえ」

さらに触手が阿久津の左脚に巻き付き…：やはり力づくで折った。

「ぐああああああ」

「それともシージンちゃんの方が阿久津君を好きだったのですか？ ああ、ひよっとして、この男に抱かれないから、異形の身体が嫌になったとかですか？」

「やめろ！ やめてくれ！」

シージンがついに懇願の口調になる。

「なら、私の言いたいことがわかりますね？」

「……汀嬢……頼む」

この時、あたしは内心反対していた。阿久津は『安楽死』させてやるべきだとも思った。しかし、シージンに阿久津を見殺しにできない。

そして、人情家の汀については言うまでもない。

汀は黙って頷き、例の結晶細胞を背中から取り出す。

「一、二、三で投げるわ」

「ええ、構いませんよ。何なら、私が先に阿久津君をそちらに渡してもいいぐらいです」
ただし、もう阿久津はまともに歩くことすらできない。つまり触手の射程にいる限り、杏の人質も同じだ。

「一、二、三」

汀も杏も約束を守った。

杏の触手に放り投げられた阿久津は、シージンに受け止められた。阿久津は重症で呼吸困難だが、一命は取り留めたようだ。

一方、汀に放り投げられた結晶細胞を、杏はあくまで触手で受け取った。そして、空に掲げたまま、文字通りの触手でべたべたと触っていた。

畏を疑っているのかと思ったが、どうもそれだけではないらしい。

何故なら、杏は器用にもその結晶細胞を異形の触手で貫いたからだ。ちなみにこの間、杏はヒト本来の腕や指は一切使わず、すべて赤黒い異形の触手のみで作業している。

さらに杏は「んっ」と一瞬喘いだ。

そして、【紅玉の杏】^{あんず}がニタリと笑う。

「ついに手に入れたわ」

見れば、異形の触手に貫かれた結晶細胞は淡く輝いている。何となく、先の《稲剪》^{イナギリ}に似ている気がしたので、汀に目をやったが、彼女は横に振った。

「私もあんな化粧^{けわい}は見ただ事がない」

「何故そこで化粧？……ってあれ……」

そう、たしかにそれは先史時代の化粧を思わせた。

貫かれた結晶の燐光が赤みを帯びる。

その光は赤く輝く筋を成し、葉脈のように異形の触手へと伸び広がっていく。すると当然、本体である杏の肉体へと辿りつくが、葉脈の成長は止まらない。紋様とも呪飾とも呼べる形状で、杏の全身を覆う。

「……あれ、即席の電子回路？」

「……あれ、あれやっぱり演算結晶だったの？」

あたしたちは混乱の只中であつたが、杏にとってはこれも予定通りらしい。

彼女は全身も触手も赤色の葉脈に犯されていながらも、シージンを見つめる。

「さて、シージンちゃん？ あなたの事は本気で愛していたのに、裏切られた女の情念、思い知ってもらいましょうか？」

「黙れ！ アタシをこんな身体にした挙句、阿久津にまで、よくも……」

「阿久津君も覚悟があつてのことでしょう？ それに手術についてはあくまで必要なものでしたよ。シージンちゃんみたいに若いと、どうしても転移が早いから丸ごと取っちゃうしかありません。なら、代替臓器に異形細胞を使うのも一つの選択肢だと思いませんか？」

「……ああ、その通りだ。だから、貴様には恩義も感じていたし、貴様の命令に従つてもいた。だが、もう、十分だ。これ以上、貴様の外道に付き合う義理はない」

「あらー？」

杏は首を傾げる。

「あらあらあらあらあー？」

さらに、結晶細胞をいとおしげに近くへ手繰り寄せる。

「シージンちゃんってえ、そんなに嫌々お仕事していたんですかあ？ 殺しと壊しの時はいつも笑っていたんですけどお？」

「……！」

「嫌よ嫌よも好きのうちってえ。本当は異形細胞の力に身を委ねるのが気持ちよかつたんじゃないですかあ？」

「黙れ……！」

「でもお、今なら、わかりますう。シージンちゃんの気持ちも、姉さまの気持ちも——！」

そして、杏は胸元の紅玉をヒトの手でとる。その二つ名の由来にもなった指輪を掴む。汀がそこで気付いたらしい。

「しまった！ 『鍵』はそちらだったのね！」

杏は紅玉の指輪を巨大な結晶細胞に触れさせた。

それから、しばらくの事は恐怖と驚愕のあまり、記憶が曖昧になっている。

はっきりと覚えているのは、シージンが悔しげに吐き捨てた台詞だ。

「畜生。そういう事か……」

そう、最初から間違っていたのだ。

……あたしたちはその結晶細胞を《イマジナルレディスク幻想円盤》にしては大き過ぎると思った。だから、演算装置に違いないと考えていた。

だが、それは真正銘、大き過ぎる《イマジナルレディスク成虫原基》だったのだ。

これまで、あたしは戦ってきた相手を

蜥蜴型異形

竜盤型異形

蝙蝠型異形

などと言ってきた。それは誤りではない。ただし、より正しくは、

蜥蜴型自律式異形

竜盤型自律式異形

蝙蝠型自律式異形

と言うべきだった。その造型に違いがあっても、自律式という共通点はあったからだ。

逆に言えば、同じ自律式であっても、その造型には様々な差異があったのだ。

そこで、何故、あたし達は思い至らなかったのだろう？

ならば、同じ甲冑式であっても、その造型には様々な差異があるのではないか？

実際にかつて運用された甲冑式異形はその造型は多種多様だったという。

その甲冑造型は多種多様であり、それによって、《イマジナルレディスク成虫原基》の形状にも差異があったという。

では、巨大な形状の《イマジナルレディスク成虫原基》とはありえないのか？

そして、巨大過ぎて、演算結晶と誤認される程の《イマジナルレディスク成虫原基》は何を生むのか？

たかが、ヒトの拳ほどの大きさの《イマジナルレディスク幻想円盤》がヒトの身の丈を鎧よろう異形の甲冑をなす。ならば、ヒトの頭ほどの大きさの《イマジナルレディスク幻想円盤》が何を生むのか？

その答えはまさに眼前にあった。

巨大な結晶細胞は、巨大な異形細胞へ、と見る見るうちに変わっていく。

そこまでは、通常の甲冑式異形と同じだった。

違うのは、通常の甲冑式異形はそれこそ身の丈を鎧う程にしか膨れ上がらないのに対し、

巨大な《イマジナルレディスク幻想円盤》は明らかにヒト一人を包むには大き過ぎるまでに膨れ上がった。そう、

だから、あれはあんなに重かったのだ。

あまりの事に茫然としていたあたしも、FN・P90を杏に向けて発砲する。

しかし、大方の予想通り、杏の触手がそれを防ぐ。

いや、それだけではない。異形化した《幻想円盤》イマジナルディスクからも触手が伸びたのだ。

——あの《幻想円盤》イマジナルディスクの触手って、杏のものと同じなの？ いえ、杏の触手こそが《幻想円盤》イマジナルディスクのものと同じなの？

そして、夥しい数になった触手が周囲の自律式異形を次々と貫き始めた。

いや、これは

——異形を……喰っている。

そう、《幻想円盤》イマジナルディスクは触手で貫いた自律式の異形細胞も吸収し始めたのだ。

一応、触手の回避に成功する自律式もいた。しかし、回避できなかった自律式が《幻想円盤》イマジナルディスクに取り込まれ、その体積質量が増大し、触手の長さも数も増えて行く。当然、自律式が回避を続けることは難しくなる。

結果、《幻想円盤》イマジナルディスクは雪だるま式に大きくなる。

異形の大半を食らいつくしたところで閾値を超えたのだろう。触手は残りの異形を襲う事をやめた。

代わりにソレの触手と杏の触手が絡み合い結びつく。高分子ニューラルネットワークが無秩序な自己増殖から、秩序的な創発現象を起こし、特定形質への自己組織化へと至ったのだ。

杏は歓喜と恍惚に震えながら、周囲を異形の触手で覆われる。原理を考えれば、それは蛹さなぎであったが、外観は蕾つぼみに似ていた。大きさが桁違いである事に変わりはなかったが、それは羽化というより、開花と呼ぶに相応しかった。

そう、荘厳に燃え盛る焰まんじゅしやげの花のような巨体が練り上げられたのだ。

総計六十四本にも及ぶ触手。

数多の三次元送受信球形配列。スフィア・アレイ

細身の胴体と四肢に、曲線で構成された真紅の装甲。

全高7・2メートル、基本重量17・95トン。

TO3G || Chastity Type 03 Gem LYCORIS || RADI
ATA.

「巨人……!!！」
ダイラボッチ

あたしが思わず呟くと、その巨人^{ダイダラボッチ}の胸元から、半裸の杏が「んっ」と上半身を出し、わざわざ答える。

「はい。巨人型・甲冑式異形≪ダイダラボッチ≫——三号機≪リコリス≫ライダーアータ≪です」

かつての秘密結社≪荒夏≫の決戦兵器Ⅱ巨人型・甲冑式異形≪ダイダラボッチ≫。

あのダイダラボッチが以前出現した時は、自衛隊第10師団が総掛りでようやく倒せたという。

通常型の甲冑式異形が戦術上の切り札とすれば、巨人型の甲冑式異形は戦略上の切り札だったのだ。

あたしの眼前にあるのが、まさにその巨人型^{ダイダラボッチ}の三号機だという。

「これが人類の新たななる可能性!!」

杏は高らかに宣言する。最早、半裸を恥じらう事もない。

まるで炎が風にゆらゆら揺らめく様に、夥しい数の触手がビクビク蠢く。

「ああ、気持ちいいです、気持ちいいです、気持ちいいです!」

その度に杏は快感を隠さなかった。

そこに隙を見いだしたのかもしれない。

「ちっ!」

汀がダイダラボッチへ野太刀を打ち込む。しかし、

「あらあら? これはただの結晶細胞にエミュレーションさせた刀ではありませんね?」

杏はダイダラボッチの注連縄^{しめなわ}を思わせる腕で野太刀を受け止め、解析を始める。

「…:むしろ、女媧泥ユニットに近い?」

「はああああ!」

汀は珍しく、そして何故か大声で叫んだ。

すると、野太刀が…:輝いた!

比喩でも何でもない。冗談抜きで刀身が発光しているのだ

さつきも思ったが、どーいう理屈だ?!

しかし、杏には心当たりがあったらしい。

「あははははっ! 持ち主の脳神経系を同種の演算素子と誤認してアドホック接続しているんですか? それじゃ、これって、エミュレーターではなく、オリジナルの精霊結晶

なんですか？」

野太刀の輝きがダイダラボッチの異形細胞を浸食していく。

「人の想いに応える……光の刃」

シージンも援護射撃に出る。増量強装マッシュアップとはいえ、所詮は拳銃弾だから、異形装甲で軽々防がれる。せめてもの牽制のだろう。

「素敵ですねえ。でも、無力ですねえ」

ダイダラボッチの触手が汀に襲いかかる。

「ちっ」

汀も回避のために後方へ距離を取らざるを得ない。

その間にシージンは弾切れ、ダイダラボッチには傷一つ負わせられない。それどころか、汀の付けたわずかな傷すら再生していく。

「この程度で、この三号機はやられませんよー」

杏が嘲笑い、そして、舌なめずりをする。

すると、何故か阿久津は傍にいたシージンを突き飛ばした。

「阿久津っ？」

「『イースターエッグ、種別コード…S、目標ターゲット…杏』！」

困惑するシージンを尻目に、阿久津は残った自律式に命令を出す。コマンド

「だから、無駄ですよー」

杏の指摘に、あたしも内心同意していた。

生き残っていた自律式異形が杏へ次々襲いかかるが、そもそも、数が大分減っている。

結局は触手に貫かれ、ダイダラボッチの餌になるだけだ。

実際、ある蜥蜴型異形に至っては、触手でその身を絡め取られ、ダイダラボッチに踊り

食いされるありさまだった。

……そして、ダイダラボッチが片膝をついた。

「……！」

夥しい数の触手も蠢動をやめ、しなびていく。まるで、夜にしばむ花の様だった。

「阿久津君、あなた、自律式異形の中に……!?」

「そうだ。あんたと同じように、予め仕込んでおいたのさ。【紅玉の杏あんず】特製の異形細胞鎮静剤だ！」

この前、杏自身が使ったやつか！

細かい手法はわからないが、阿久津の台詞から推察はできる。蜥蜴型の中にでも、密封した容器を入れておき、さらにその容器の中に異形細胞鎮静剤を仕込んでおいたのだろう。

そして、それを知らずに杏はダイダラボッチに取り込んでしまったから……!

「その巨体を維持するため、循環器系を構築した事が仇になったな! 機能停止は避けられても、機能鈍化は避けられまい!」

「こ、こんなもの……!」

「排出するか? 分解するか? 耐性を得るか? だが、アネさんのための時間稼ぎには十分だ」

「阿久津君……!!」

「一矢報いたぞ……! 【紅玉の杏^{あんず}】、貴様は死ね……!!」

それが阿久津の最後の言葉だった。

シージンは阿久津に駆け寄ろうとしていた。

汀はそんなシージンの腕を握り、逆方向へ投げ飛ばしていた。

あたしに至っては脳裏で既に撤退計画を組み立てていた。

ダイダラボッチの動きは明らかに鈍っていたが、その巨大な足を持ち上げる事は出来たのだ。

数秒後、阿久津は踏み潰された。

あの後、あたしたちは恥も外聞もなく逃げ出した。

ダイダラボッチが機能不全で移動困難な隙に、必死に距離を稼いだ。

そして、一息ついて間もなく、シージンは汀に掴みかかった。

「何故だ!? 何故、あの時、アタシを止めた?!」

「男子が命を賭けた願いだったから。あなたに应える義務があると思ったから」

「こうやって逃げ回る事が、阿久津に应える事なのか?!」

あたしがポツリと話に割り込む。

「……それがわかっていたから、こうやって逃げ回っているんでしょ?」

「……!!」

シージンは歯噛みして黙り込み、忌々しげに話を切り替える。

「救援の見込みがあるのか?」

「あるわ」と汀は言った。「ただし、間に合うかどうかは怪しい」

「ハッ。そりゃ、そうだろうよ。元々、足がつきにくいアジトを選んだんだしな」

まして、ここは今や『試される大地』の北海道である。本州以南と違い、警察を含めた

治安機構はそこまであてにならない。

いや、仮にここが本州以南だったとしても、相手はあの《ダイドラボッチ》だ。半端な戦力では二重遭難になる。誰もが救援には慎重になるだろう。

「畜生、このまま逃げ回るしかないのか……」

「……それは多分無理ね」

そう、逃げられない。

こんな時、気配を読める自分が恨めしい。《ダイドラボッチ》はゆっくりだが、確実に近づいてきている。それがはつきりわかる。情報隠蔽のためか、あたしたち三人を見逃すつもりはないらしい。

「わかるのか？」とシージンは聞いて来た。

「というか、今、ダイドラボッチは各種^{アクティブセンサー}能動探査全開よ。少なくとも、杏は隠す気がないみたいね。その上、ダイドラボッチの移動速度はどんどん上がってきているわ。異形細胞鎮静剤の効果が切れてきているみたいね。ダイドラボッチの設計上の最高自走速度は不明だけど、象よりも遅いという事はないだろうから、このままだと遠からず追い付かれ……」
そこでシージンが口を挟む。

「だから、何故、お前にダイドラボッチが各種^{アクティブセンサー}能動探査を使っているのかがわかる？」

「そりゃあ、甲冑式異形には生体レーダーの類が搭載されるものだし、ダイドラボッチの様な巨人型なら、ペイロードに余裕もあるから、その分、強力なレーダーも……」

「だから、何故、お前はアクティブレーダーを逆探知できるのかと聞いている」

「……あー、なるほど……」

あたしはそこでシージンと話がかみ合わない理由を理解した。

どうやら、シージンはあたしの『カンの良さ』を現象として理解していただけで、その原理についてはさっぱりだったらしい。

汀がそこで助け船を出す。

「キャロットはね、可視光線以外の電磁波の類も感知できるの。それがその娘の『カンの良さ』の正体よ」

「なんだと？」シージンは一瞬驚き、そして考え込む。「いや、たしかにそう考えると、辻褃も合うが……しかし……」

「何か疑問でも？」あたしはわざと首を傾げる。

「ああ。では聞かせてもらう。一つは何故、電磁波を感知できるのかという疑問だが……これは色々それらしい装備を身につけているから、さほど不思議ではない。気になるのは仮にそんな能力があったとして、それだけで突出した成果が上げられるか？という事だ。」

受動・能動を問わず、電波探知機はとつくの昔に実用化されている。当然、電波探知機を実戦運用する奴はいるし、それはそれで有利にもなるだろう。……だが、それだけなら、所詮は多くの一つに過ぎないのではないか？」

「何だか、捕まったり逃げ出したりが続いているあたしだが、それは相手が悪いだけで、その辺の雑魚に負けたりはしない。しかし、その辺の雑魚でも、最近は電波探知機ぐらい装備している。だから、電磁波を感知できるだけで、戦場で無双できる理由にはならないはず……。」

……とシージンは不思議がっているらしい。

「あたしはもう十五よ。当然、ソフトウエアが成熟し、フレーミングも洗練されているわ。それこそ、人間並みにね。それが理由」

「……？」

「要するに、キャロット・マリオンは遺伝子操作で誕生した超感覚能力者なのよ」

汀はあっさりとしたあたしの正体について言及した。

「知っていたんだ？ あたしがあの日食べた鮭と同じだと？」

「………」

ESP (超感覚的知覚) とは、文字通り「一般的な感覚、以外で知覚すること」を指す。

つまり、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などの五感以外による知覚だ。

これは突拍子もない話ではない。

そもそも、ヒトにはいわゆる五感以外の知覚もある。例えば、加速度を知覚するための『平衡感覚』はその一つだ。また、いわゆる触覚と一まとめにされる体性感覚も厳密にはもっと細かく分類されている。

これがヒト以外の生物になれば、尚の事。

ある種の蛇は赤外線感知器官を持ち、獲物の体温に対するパッシブセンサーとしている。あるいは電気鰻は微量の電気を水中に放射し、アクティブセンサーとしている。

そして、鮭は前耳骨付近に磁性微粒子を多量に保有し、それが脳の両側へと神経で直結されている。鮭はこれによって地磁気を感じし、何千キロもの回遊を成し遂げられるのだという。

……あたしはそれと同じだ。

(いや、著しく微弱ながらもホモサピエンス全般に、この手の生体磁石による感知能力が

存在する可能性は示唆されている。ただ、あたしの感知能力は文字通り桁違いなのだ)

シージンは二重三重に驚いていたが、同時に理解すべく努力もしていたようだ。

「では、フレーミングとは……記号着地問題を解決しているという事か？」

「……ええ、あたしは密閉された容器の中にある『リングとトマト』を見分けられるわ。勿論、一定の電波が透過・反射される事が必要条件だけど」

「……凄まじいな」

シージンは簡潔にそう言った。

だが、同時に納得もしているようだった。

人間は『リングとトマト』を一目で見分けられるものだ。が、コンピューターはそうはいかない。考えてみれば、当たり前だ。『リングとトマト』は双方共に赤いし、丸いし、種子植物の実でもある。むしろ、それを一目で見分けられる人間の方が不思議なのだ。

しかし、人間は現実に『リングとトマト』を見分けられる。これが『フレーミング』と呼ばれる現象だ。また、同じ事をコンピューターにやらせようとすると、上手くいかない問題を『記号着地問題』という。

この辺りを詳しく解説すると、それだけで数頁が必要なので割愛するが、とりあえず、人間は長年の経験から『フレーミング』を実行し、ソフトウェア的に『記号着地問題』を解決している……らしいのだ。

だから、人間は『リングとトマト』を一目で見分けられる。

そして、あたしの『カンの良さ』はこれを五感以外に拡張したものだ。

先程シージンは指摘した通り、受動・能動を問わず、電波探知機はとつくの昔に実用化されている。機械装置の精度も出力もあたしの『感覚』をはるかに上回る。

ただし、その先のソフトウェア処理において、あたしは一般的な電波探知機をはるかに上回っているのだ。

そう、単に電磁波の類を感知できるから、超感覚なのではない。

あたしは、感知した情報をさらにフレーミングし、記号着地することで、敵意や危機を文字通り『直感的に』認識し、把握し、先読みし、常に先手をとってきた。

「だからこそ、超感覚と呼ばれるに足るのよ。でも、こういった超感覚に対応するソフトウェアは結局、遺伝的アルゴリズムで作り上げるしかなかったらしいわ」

「それが苦小牧で行われていた『感覚増幅型マリオン』試験の概要？」

「……汀は知っていたんだ？」

「いいえ、知らなかったわ。だから、調べたの。そしたら、たまたまツテがあった。それだけの事よ」

「話がよく見えないのだが……?」とこれはシージン。

「キャラロットにはもう説明したけど、再確認のためにも、もう一度最初から説明するわね。まず、私の知り合いには《マリオン》が何人かいるの——ヒト受精卵内核遺伝子操作計画《マリオンプラン》の成果物がね」

「……では、汀嬢にはこいつ以外の超感覚能力者の知り合いがいるのか?」
シージンの声には期待の色があった。しかし、汀は冷徹に否定する。

「いいえ。それは違う。私の知り合いの《マリオン》は超感覚なんて、胡散臭いものとは無縁だったわ。それはむしろ……」

汀の方ではないのか?——とあたしは思ったが、黙っていた。

「いえ。とにかく、あたしの知っている《マリオン》は超感覚なんてなかったの。でも、だからこそ、私は《マリオン》たちに相談してみたわ。すると、彼女たちにも心当たりはあったらしい。キャラロットは《マリオン》の中でも規格外な個体なんじゃないかってね」
「亜種……ということか?」

「ええ、《マリオンプラン》の設計思想はずばり『目指せ業界標準!』——遺伝子の全面調整による『標準型』^{スタンダード}としての確立。だから、《マリオン》の設計はむしろ保守的だった。『枯れた技術の水平思考』というやつ。超感覚みたいな胡散臭い発想は、むしろ積極的に排除されたわ」

その結果、旧《荒夏》にいくつもあった『人間の品種改良計画』の中では、希少な実施例にして最大の成功例となった。

汀に《マリオン》の知り合いが多いのはそのためだろう。

「でも、だからこそ《マリオン》の設計案自体は、革新的な発想を試す絶好の素体として、流用されもした。例えば、ヒトに特殊な器官を先天的に増設し、超感覚を発現させるため——とかね」

……そして、あたしが産まれたというわけだ。

「これは私の推測なんだけど、キャラロットの目や髪が赤いのは……」
「ええ、そうよ。あたしの赤目赤毛はこの超感覚のための生体磁石やら金属イオンやらの影響みたいね」

ちなみに、汀も指摘していたが、本来の《マリオン》は全員金髪碧眼らしい。

「よく障害が出なかったな。アタシも似た様なものだが、赤い髪はともかく、そんな赤い眼なんて……」

典型的な先天的障害の要因ではないか……シージンはそう言いたいらしい。

あたしは少し苛立った。なので、そっけなく言ってやる。

「勿論出たよ」

「……」

「だから、あたしには『オリジナルヒーローテンツクス根源三十六体』や通常の『プロダクションモデル量産型』みたいな『オリジナルナンバー連続番号がないの。そもそもその生存率が低過ぎて、そんなものが成立しないから」

『ロストナンバーマリオン連番喪失个体……』

「アハハハッ、何それ、厨二病く？」

あたしは明るく言っただけだ。

しかし、汀は表情を変えなかった。シージンは沈黙を続けている。

こうなると、あたしも素直に言うしかない。

「……アップル、ストロベリー、トマト……、誕生日に互いへ『ベットネーム愛称を贈り合うまで生き残ったのが、あたしを含めて四人だったわ」

「そうか……」

シージンは感情を読み取れない相槌を打った。

「まあ、そのあたしも今まさに死地へ追い込まれているわけだけどね」

わざと明るく言ってみる。実際、悲嘆にくれている場合でもない。

すると、汀が言う。

「打開策があるわ」

奇縁というべきか、あたしはあたしが吊り下げられていた廃工場に戻って来ていた。

何でも、汀はここで一時休憩と荷物保管をしていたらしい(大体な奴だと思ったが、近距離ではあたし以上にカンがいい汀にとって、むしろ合理的だったのかもしれない)。

そして、汀がその荷物を回収する必要があるというので、あたし達はダイダラボッチの追跡を避けながら、何とかやってきたというわけだ。

「要は『あんず紅玉の杏』を仕留めればいい」

『ダイダラボッチ』には勝てないから。無視するってこと？」

「ええ」

いや、言いたい事はわかるけどさあ。

「知っているでしょう？ 以前の『ダイダラボッチ』は陸上自衛隊第10師団が総掛りでようやく倒せたという話。……それすら、本当に倒せたかどうかは異論があるぐらいよ。少なくとも『ダイダラボッチ』の装甲は戦車砲の直撃にも耐えるの。私たちにそれを貫く

事は出来ない」

「そりゃそうだろうけどさー」

「なら、《ダイダラボッチ》装甲の外に露出してる【紅玉の杏】あんず本体を仕留める。自然な話でしょう？」

「……そういえば、どうして、杏は身体を外に出しているんだろう？ 異形の細胞の内に引っ込んでいる方がずっと安全なはずなのに……」

「楽観的に考えれば、【紅玉の杏】あんずは身体を外に出しているのではなく、外に出さざるをえない技術上の理由があるのかもしれない。けど……ただ、私達をなめきっているだけという事もありえるわね」

「絶望的じゃん」

「そうね。実際、私は失敗した」

そう言えば、汀はダイダラボッチへ野太刀を打ち込んでいたな。

「でも、キャロット、あなたなら成功するかもしれない」

「はあ？ 汀にできない事がどうしてあたしにできるの？」

それは正直な感想だった。あたしは汀に及ばない。だが、そんな汀が淡々と言う。

「だから、そのためにこうやって『精霊結晶』の調整をしているんじゃない」

……ここで、汀のやっている作業について説明しよう。

まず、異形培養用の大きな水槽の中に、抜き身の野太刀を置く。次にその水槽を何かの液体で満たす。……この液体、水ではないと思う。そして、水槽をUSBケーブルで汎用端末と繋ぎ、汀はキーボードをカタカタとたたき始めたのだ。

野太刀が奇妙な液体に沈んでいるまま——あれ？ こんな感じの自律式異形の調整法があつたよね。

「杏も言っていたけど、その『精霊結晶』って？」

その野太刀の構成物質である事は、さすがにわかってきたが……

「ある種のマンマシン・インターフェイスが組み込まれた演算結晶の一種とさえいえないか？ 結晶細胞側がヒトの脳神経細胞を同種の演算素子と誤認して、アドホック接続しているの」

「！ そんな事できるの？」

「できるというよりも、できた——という感じらしいわね。むしろ、この精霊結晶こそが結晶細胞本来の形なんじゃないかっていう、**リリカル**で**マジカル**な与太話もあるぐらいよ」
そういえば、杏も似たような事を言っていたっけ。

「通信規格は？」

「ヒトの脳の核磁気共鳴等に合わせてある」

「……それで情報連結が成立するの？ 通信強度が弱過ぎない？」

「我々にとつてはそうね。だから、機械的に増幅もしている」

そう言つて、汀はそのポニーテールを結んでいた止め具を外す。

……と、よく見ると、その留め具は何かと繋がっていた。あたしの頭冠とどこことなく似ているそれは……汀の頭部を覆う透明の薄膜型電子生体記録装置——いわゆるデジタルタトゥーだった。

「それ、そのためだったの?!」

驚いてばかりのあたしに対し、髪を下ろした汀(ちよつと新鮮♥)はやはり淡々と言う。
「技術的には甲冑式異形の派生よ。昔、甲冑展開時の記録を分析した時、予め設計されていた通常の先読み式主従追随システムとは別に、未知のインターフェイスが機能している可能性が指摘されてね」

そして、汀はそのデジタルタトゥー付きの留め具を汎用端末と接続して、何やら設定の更新をしている。……あたしがタマゴロモでやっていた作業にそっくりだった。

つまり、あの透明の薄膜型電子生体記録装置もやっぱりタマゴロモ繊維の一種らしい。

「だから、その検証実験を行われている。本当は甲冑式異形を使いたいところだったけど、許可が下りなかった。だから、この『稲剪』やタマゴロモ繊維が使われる事になったの」

「タマゴロモ繊維はともかく、何で野太刀の形なの？」

「さあ？ 異形開発程じゃないけど、結晶細胞技術そのものもわりと遺伝的アルゴリズム頼りだったから」

「……単なる厨二病つてやつじゃないの？ ほら、荒夏の連中つてそういうの多いからさ」

「それを言ったら、技術者なんて皆そんなものよ」

おっと、暴言ができました。……ついでに言えば、汀さん、あんたが帯刀女子高生なのも同じ理由じゃないかと勘繰っているんですけどね。

そんな事を考えていると、汀はしゅるりと制服を脱ぎ始めた。

「え？ 汀さん？」

「何をしているの？ キャロット、あなたも脱ぎなさい」

この展開は二度目である。しかし、前回よりも汀の手は早い。気が付くと、ブレザーを脱ぎ、セーターを脱ぎ、タイを外し、ブラウスのボタンを外し、タンクトップブラにすら手をかけていた。

そこで汀も汀で焦っている事に気付いた。そうでなければ、あたしは相変わらず、細くしなやかな汀の裸身に目を奪われていただろう。

「って、何で脱ぐの？ てか、あたしも脱ぐの？」
「そうよ」

汀は相槌の後、ブレザー・スカートの留め金を外し、タイツと一緒にボクサーショーツを脱ぎ……。

あたしは少しばかり錯乱した。

「え、こ、こんな時に……！ いや、気持ちは嬉しいっていうか、こんな時にいうより、こんな時だからってこと？ う、うんそうだよね。死ぬかもしれないんだから、その前に思い出を……って……」

そこで汀は全裸のまま、脱いだ着衣一式を無理矢理渡してきたのだ。

「これって……」

「……気付いたようね？」

「……全部、タマゴロモ繊維？」

あたしも慣れ親しんだ手触りで気付く。それらがすべて《T A M A G O R O M O》——
『Tension Analyzer/Motion Analyzer/Prosth Observer/Reciprocal Organic Memory Object』である事に。

ブレザーも、セーターも、タイも、ブラウスも、タンクトップブラも。

ブレザー・スカートも、タイツも、ボクサーショーツも。

靴下から長手袋に至るまで。

全部一式、タマゴロモ繊維か、あるいはその下に薄膜型電子生体記録装置を隠していたのだ……！

——え、じゃあ、汀がブラとショーツでショーツを先に脱いでいたのも？

生体情報を常時計測していたからと考えれば説明がつく。極言すれば、人間の魂はまず

脳と脊髄、あとは指先に偏在している。だから、下半身よりも上半身の計測が優先になる。

着衣に限っても、下半身のボクサーショーツを先に脱いだ時でも、上半身のタンクトップブラでの計測は続けねばならなかったのだとしたら……。

「正確には君の使っている独自改良型第二代タマゴロモと、この第四世代タマゴロモの特殊改良試作型はかなり違う。この第四世代には人間の皮膚にあるニューロンの脳に似た計算処理能力を模倣・拡張し、タマゴロモの構成繊維自体に演算機能を持たせてある」

「……？」

さすがのあたしも話に付いていけなくなってきた。

「……技術的な過程や詳細は省くわ。結論から言うと、これら一式を装備した上で、精霊結晶で形作られた私の《稲剪》を『探り針』にすると、統計上有意な水準でカンが冴えるのよ。私みたいなAAS患者なら——それこそ、極近未来予知が可能になるぐらいにね」

「ある種の自己組織化を進め、閾値を突破する事で、情報工学的な相転移現象が発生するって事？」

「ええ、それが私のカンのよさの理由よ。だから、君も脱いで着替えなさい」

そう言われると、あたしも脱がざるをえない。他に代案がない事は間違いないからだ。だから、言われた通り、手を動かす。ただ、疑いを口にする事も許されるだろう。

「……でも、その汀でも≪ダイダラボッチ≫には敵わなかったんでしょ？」

「どれだけシステムで補助し、ソフトウェアで補完しようとも、限界がある」

汀はコンコンと自分のこめかみを指で叩いて見せた。

「何しろ私はハードウェア的には凡人で、先天的に強化されているわけではないから」

「……逆にあたしなら、話が違ってくると？」

「ええ、私は確信している」

「いや、理屈は成り立つのかもしれないけど、ぶっつけ本番じゃ……」

「実際、君のデータを使ったシミュレーションでは、常に私より良好な数値をはじき出していたわ。それに合わせての設定調整も今終わったしね」

「？ あたしのデータなんて、どこで手に入れたの？」

「君が寝ている間に」

「………！！」

しれっと言う汀に、あたしは絶句した。

どうも、彼女の隣で寝ている間に、あたしはあたしのタマゴロモから生体情報ヴァイタルデータをぶっこぬかれていたらしい。いや、汀が本気になれば、それぐらいできる気はしていたが……。

「おい、もう≪ダイダラボッチ≫が光学観測できる距離まで……」

そこで顔を出したシー진은、いきなり目を覆った。

「そ、そういう事は後でやれ！！」

ちなみにその時、あたしと汀はちょうど互いに全裸で向き合っていた。

戦端は7・62ミリNATO弾で開かれた。

シーじんがこの廃工場の武器をかき集めていると、肥土が使っていたものと同型の回転式機関銃——『ミニガン』(のおそらく予備)を見つけたのである。女三人でこれを持ち運ぶには無理があったが、この廃工場での『籠城戦』ならば、問題ない。これ幸いと、

三脚で実射可能に整備調整しておいたのだ。

当然、《ダイダラボッチ》が光学観測された時点で、これを使う事が決まった。勿論、いくら『ミニガン』がビームみたいで7・62ミリNATO弾を連射できるとは言っても、さすがに主力戦車の大口徑滑空砲ほどの威力はない。

そして、以前の《ダイダラボッチ》はその戦車砲の直撃にも耐えた記録がある。以前の《ダイダラボッチ》と、現在の《ダイダラボッチ》には幾つか差異があるもの、さすがに『ミニガン』で倒せるとは思わない。

だから、狙うのは当然、《ダイダラボッチ》ではなく、【紅玉の杏】になる。

——これで仕留められれば……!

あたしもそう思いながら、シージンが引き金を絞るのを見た。

「阿久津の仇……」

シージンがそう口にしていても知っていた。

だが、失敗だった。

まず、試射同然の第一射は《ダイダラボッチ》の装甲で防がれた。

それに続いて調整した精密射撃は、《ダイダラボッチ》に花卉の様な異形の盾で射線を遮られ、7・62ミリNATO弾はやはり防がれる。

いや、それだけでは終わらなかった。

なんと、《ダイダラボッチ》がその巨体で駆け寄り、さらには長大な触手を伸ばす事で、発砲するシージンに迫ったのだ。

「くっ」

こうなると、シージンも頼みの『ミニガン』をむしろ、触手の迎撃に使わねばならない。シージンは押し寄せる触手の群れを、必死に打ち落とし続けたが、すぐに破綻した。

三脚で固定された『ミニガン』の射撃範囲の外側から、異形の触手が襲いかかったのだ。

「ちっ」

そこに汀が割り込んだのは間一髪だった。

汀は大振りのククリ(シージンに借りたグルカナイフ)で、赤黒い触手を断ち斬った。相も変わらず、見事な一刀両断である。しかも、この時、汀が手にしているのは愛用の

野太刀とはかけ離れた異刀、身に纏っているのは裸身にあたしの外套マントのみという有り様だ。汀の腕前が装備に依存したものではない証だった。

そして、汀はそのままシージンを守る態勢に入る。これではダイダラボッチの触手も、

うかつに攻められない。

しかし、『ミニガン』は別だった。さすがの汀もシーजनを守るだけで精一杯、とても『ミニガン』にまでは手が回らない。

当然のように、今度は触手の群れが『ミニガン』を襲う。もはや止めるものなどない。あたしの胴体ほどもある触手が『ミニガン』に何本も絡みつく。

三脚で固定された『ミニガン』はこれで使用不能。あたしたちは最大火力を失った。

だが……これであたし達と≪ダイダラボッチ≫ || 【紅玉の杏^{あんず}】は一直線で結ばれた！
「キャロット、出番よ！」

「りよーかい！」

汀の合図で、あたしが飛び出す。

その身に纏うは汀の学生服！ 色々サイズが合わなくて、かなり辛いがそこは我慢！

「っていうか。胸がちよつときつい！」

「我慢なさい、ロリ巨乳！ 縦には余裕がある筈よ！」

「そっちはブカブカよ！」

そして、軽口を叩きながら、あたしは触手の上を駆けていた。

言いたいことはわかる。あたしだって、最初に汀の『打開策』を聞いた時は耳を疑った。

しかし、厳然として、あたしは触手の上を駆けていた。あたしの胴体ほどしかない異形細胞の触手の上を駆け抜けていた。あたしと≪ダイダラボッチ≫ || 【紅玉の杏^{あんず}】とを、奇しくも一直線に結ぶ橋となった赤黒い触手の上を走っていたのだ。

「そんな馬鹿な……！」

杏のそんな驚愕の声が聞こえた気がした。いや、実際に聞こえていたのかもしれない。この時、あたしの——ただでさえ、常人を上回る——感覚は、しかし、確実に拡張されていた。

いつもの超^E感^S覚^Pとは明らかに次元が違う。感覚器官から齎される情報の奔流が、しかも、その認識においては最適化されている。さしずめ、【超認識】とでもいうのか？ 全身を覆う第四世代——人間の皮膚にあるニューロンの脳に似た計算処理能力を模倣・拡張し、構成繊維自体に演算機能を持たせてあるタマゴロモと、左手で鞘ごと抱えている既に存在そのものがフ^アン^タジ^ジな精霊結晶の野太刀の力を認めざるを得ない。

そして、そういった【超認識】とあたし本来の【超感覚】の相乗効果は汀の言葉を実証していた。

例えるなら、それは箸はしの扱いに似ていた。東洋人の多くは、幼い頃から箸を使い続ける。すると、箸が己の指の延長に思えてくる。それどころか、箸の先で触れたものを指の先で触れたものの様に感じ取れるようになる。

これが汀なら、刃そのものを己の手足と見做し、その刃先で触れるものを指先で揺れるものと見做せるのだろう。タマゴロモや精霊結晶による補助があれば、なおのこと。周囲一帯を文字通り『刃圏』となす事ができる。

しかし、あたしは元々が【超感覚】持ちである。汀があくまで刃の届く先までをのみ、己と見做すのに対し、あたしは理論上無限の距離を認識できる可能性を秘めている。

いや、現実には様々な障害があるから、これはあくまで理論上の話だ。

ただ、それでも、この時のあたしが周囲の时空そのものを把握していた。

それは既に『結界』と呼べる段階にあったと思う。

それは極近限定とはいえ、ほとんど予知能力に近い——【疑似超反応】である。

さもなくば、あたしにこんな曲芸じみた動きができるはずがない。あたしは運動能力において鍛え上げられているが、それだけだ。汀の様な達人には遠く及ばない。

触手の橋を渡るなど、論外だったろう。

いくら一直線とはいっても、触手の太さはあたしの胴体ほどしかない。蠢動もすれば、脈動もする。凹凸もあれば、ぬめりもする。そんなものを足場に全力疾走など、予知能力でもなければ、不可能だった。

しかし、この時のあたしはたしかにそれを成し遂げていた。

「……！」

一瞬、触手がビクンと震えた。『縮もう』としたのだとすぐにわかった。触手の先の『ミニガン』を引き抜きつつ、あたしを振り落とそうとしたのだ。だが、失敗した。あの『ミニガン』は三脚で固定されている。そして、その先は鉄鎖で廃工場そのものに結んである。

勿論、『ダイダラボッチ』が出力を全開にすれば、そんなものは引きちぎれる。しかし、時間稼ぎには十分だった。実際、その数瞬で、あたしは『ダイダラボッチ』Ⅱ【紅玉の杏】との距離を大幅に縮めていたし、杏もあたしを振り落とすのではなく、貫き殺そうとしたらしい。

触手の上を駆けるあたしに、また別の触手が迫る。

「おおおおおおおおおつつ……！！」

夥しい数の赤黒い触手があたしへ次々と襲いかかる。

あたしはそれを躲して、躲して、無理そうなら、FN・P90で撃ち払う。

こんな神技ができるとは自分でも思わなかったのだから、杏の驚きはあたし以上だろう。ついには杏も、あたしを貫き殺すのではなく、今度こそ、振り落とそうとし始めた。だが、ギリギリで間に合った。

もはや、橋としては成り立たなくなった異形の触手をいくつも飛び跳ね渡り――
あたしは《ダイダラボッチ》の懐へと潜り込んだ。

すぐFN・P90の銃口を杏へ向けるが、これはやはり、花卉の様な異形の盾で射線を遮られる。

「ちっ……！」

「アハ……♥」

あたしが舌打ちし、杏が笑う。

そして、触手があたしに襲いかかる。やはり一本や二本ではない。数え切れない異形の触手が四方八方から押し寄せる。

あたしは全力で回避をしようとしたが、失敗した。油断ではない。油断ならよかった。必然の失敗だった。何せ、接近した分、《ダイダラボッチ》の触手の密度は上がっている。いくら未来予知じみた事ができたとしても、周囲一帯を触手で埋め尽くされれば、自然、回避の余地はなくなる。

だから、あたしの愛銃FN・P90は粉々に砕かれた。

発砲のため、突き出す姿勢になっていたので、回避が間に合わなかった。

しかし、こうなっては仕方がない。凄く悔しいが、ここはFN・P90を潔く諦めて、
汀の野太刀を使わせてもらおうしかない。

あたしは鯉口を切り、刀身を抜き……。

「あれ？」

……放つ事ができなかった。

「……」「……」

杏だけではない。視界ギリギリのはずの汀までもが息を飲んでいた。

「ぬ、抜けない」

長過ぎる刀身が鞘の中で引っかかっているのだ。

「何やっているの!？」

そんな汀の声ツメセクトが頭冠から届く。

「いやだって、こんなに長いのに、そう簡単に抜刀なんて出来ないよ!!」

「そういう時は！ 鏢近くを握った片手斬りの体勢から、斬撃中に柄を滑らすことで刀の間合いを伸ばすの！」

「い、いきなり言われても……！」

「真新陰流開祖…小笠原長治が『八寸の延金』なる技術を用いた記録があるでしょう！」「ごめん！ 意味がわからない！」

「失伝したから、詳細は不明だけど、字義通りに解釈すれば、八寸ほど刃金が延びる事になるわ！ 実際、天真伝兵法の開祖…白井亨はこれを『八寸の伸曲尺』として復元しているの！」

「だから！ 意味がわからない！」

「そして、天真伝兵法は富山藩士吉田有恒が継承し……」

「知るか……！」

あたしは力づくで、刃を抜き放つ。

次の瞬間、鞘が砕け散った。

そう、『稲剪』が光を放っていた。

輝きの中、精霊結晶の刀身——神剣がその形を変えていく。

片刃の刀から、両刃の剣へ。

野太刀から、十握剣へ。

赤く燃え盛る焰の如く、熾き上がる。

「火色の両刃？」

「いえ、むしろ人参色というべきかしら？」

杏は驚き、汀は冷ややかに言った。

あたしの髪と同じ色に染まった『それ』は鋒の両刃になって、大きく張り出した剣の形をとったのだ。

「尾刃張……？」

相も変わらず、正体不明の発光現象だが、一つわかった事がある。

「火神斬りし神産みの剣——ヲハバリ！」

……やはり、この刃は人の思いに応える光の結晶だ。

汀の精神は鋭く研ぎ澄まされているものの、その先がない。人の魂というべき電気化学反応は脳内で完結しており、それを外界に拡張する手段を持たない。

だから、汀の時は野太刀の形をとった。逆に言えば、野太刀の形しかとれなかった。

だが、あたしは違う。歪ながらも【超感覚】を具えて産まれ落ちた。人の魂といふべき電気化学反応は脳内で完結しておらず、それを外界に拡張し続ける事で生き長らえてきた。だから、鋭さでははるかに劣るが、大きさでは明らかに勝る『尾刃張』の形をとるのだ。それを裏付けるかのごとく、あたしの全身に張り巡らされた薄膜型電子生体記録装置が淡く輝いた。【紅玉の杏】の化粧と同じだ。情報回路として機能しているのが、自分でもわかる。

あたしは『尾刃張』をあたしなりに構える。勿論、汀の様な隙のない構えではない。しかし、それが『結界』だった。実際、≪ダイダラボッチ≫の触手があたしを襲う事はなかった。いや、杏はあたしに触手を差し向けはした。しかし、その寸前で触手の動きが鈍る。まるで見えない壁に阻まれるように、あたしから一定の距離以上には近づけない。物理的な防御壁が形成されているはずもない。

しかし、何かがあたしを守っていた。

「互いのインターフェイスが干渉し合って、不具合を起こしているのっ？」
杏が叫んだ。

実際、そんなところかもしれない。触手以外の≪ダイダラボッチ≫の動きも鈍っている。さもなければ、あの巨体だ。単純な運動速度で生身の人間を大きく上回るはずだ。それは巨象がヒトよりも走るのが速いのと同じ、自明の理だ。杏が≪ダイダラボッチ≫を一度、引かせれば、あたしに追い付く術もなかった。そうすれば、『尾刃張』も届かない。

なのに、下がらない。となれば、下がらないのではなく、下がれないと見るべきだった。それはあたかも、神威に勝敗を左右される上古の戦だった。

…だからか、幻聴まで聞こえてきた。そのくせ規則正しい韻律だった。

「ははは、四弦音階が聞こえるわ」

「いいえ、魂振歌よ」

「どうやら、汀にも聞こえていたらしい。ということはただの幻聴でもないようだ。」

「魂振歌? …いや、たしかに古代の完全音組織っぽいけど」

「違う。間音三つの四弦音階ではない。二種核音が完全四度を成し、そこに一つの間音――≪クシナダ旋律≫ね」

「これ…あたしの『尾刃張』の精霊結晶が、杏の≪ダイダラボッチ≫の異形細胞へと、干渉している余波って事？」

「正解」

初期のコンピュータの中には作りが甘く、メモリにアクセスする時、高周波を外部に漏らすものがあつた。それを逆手にとり、そのスイッチングノイズをラジオが受信させて

音階にする事があったという。

今、起きているのもそれと似た現象だと汀が言う。

「邪気を払う鳴弦の音よ」

実際、《ダイダラボッチ》の〓【紅玉の杏^{あんず}】は喘ぎ苦しんでいた。

「ひっ！ ひんっ！」

杏の下半身は以前から異形に埋まっていたが、その触手が上半身にまで這い寄り始めたのだ。

「ひぎっ！ ひぎっ！」

ぬめりを帯びた赤黒い触手が杏の細腕に絡み付き、さらには乳房を締め上げる。異形と裸体がそろつてのたうちねじれ、艶めかしくその身をくねらせる。まだ、外界に露出している上半身ですらこうだ。下半身は異形細胞に埋まっているものの、ビクンビクンと腰を震わせている。うねる異形の触手によって、おぞましい踊りを強いられている事は間違いない。その結果、杏の口はもはや言葉を紡ぐ事をやめ、その舌を空へと突き出し、悶えに悶え続けている。

「あ……っ！ あ……っ！」

明らかに制御が効かなくなっている。

——「もう、やめろっ！」

その時、あたしへ声が届いた。

——「違うだろ！ あんたそんなじゃなかったろ！！」

聞こえるはずのないシージンの声が聞こえたのだ。

——「アタシや阿久津を救ってくれた時のあんたは、そんなじゃなかったはずだ！」
今、あたしが握っている刃は人の想いに応える神剣だという。

だからだろうか、あたしの『結界』の中では人の想いが交錯していた。

シージンの杏への想いもその一つだ。

彼女は【紅玉の杏^{あんず}】の頭はイカレていると何度も主張してきた。そして、杏の行動はたしかに狂気の沙汰だった。杏は《ダイダラボッチ》の入手に成功はしたが、それで何をするつもりだったのか？ 以前の《ダイダラボッチ》は強大な力を見せつけなら、結局は自衛隊に葬られたという。同じ末路を迎えるのが、杏の望みか？ そうだとしても、杏は既に危機を迎えている。インターフェイスが干渉し合って、不具合を起こしている上に、弱点となる杏自身の肉体を露出しているのだ。仮に杏が理性的であれば、予め改良改善の余地があったはずだ。

……なるほど、今の杏は利根的な狂気に支配されている。

では、何故、【紅玉の杏】^{あんず}は狂っているのか？ 初めからか？ いや…:

『こうみえても医者ですからね。IGFTELも使い放題なんですよ』

唐突に、杏がIGFTEL——インシュリン類似成長因子三型内因性リガンド——現在主流となっている神経系初期化剤を大量服用していた事を思い出した。

背中の触手を操るだけでも、大量の薬物で感覚野を初期化しなければならなかった。異なる形の肉体を操るためには、異なる形の精神を得なければ、ならないからだ。

それでは≒ダイダラボッチ≒の巨体を操るにはどれだけの初期化が必要だったのか？

——人格すらも部分的に初期化してしまった？

——だから…: 正気を保てなかった？

杏自身その危険は承知していたはずだ。実際、誘導剤で神経系の初期化領域を限定する技術はそれなりに成熟している。また、現状の異形細胞の情報処理能力は節足動物の梯子状神経程度とはいえ、だからこそ、昆虫の様に情報処理を全身で分散処理する事も出来る。まして、あれほどの巨体だ。動歩行などの環境最適化の下流工程は異形細胞側に一任してしまってもいいはずだ。

ただし、それを判断する人格そのものが汚染されていれば、話が別だ。

そもそもが未知への挑戦だ。もしも、【紅玉の杏】^{あんず}が本当に『医者 of 鑑』と呼ばれる人格者であれば、自分自身を実験台としたはずだ。なら、知らず知らずの内に、己の魂を犯されていてもおかしくはない。

——『あたしたち』と同じか…:

ふと思いつく。本来、ヒトに具わる筈のない【超感覚】^{ESP}に、精神が適応できず、正気と生命を失っていった姉妹たちの事を…:

それはあたしの隙^{すき}だったのか？ あるいは≒ダイダラボッチ≒の防衛反応だったのか？ もはや、杏の制御を外れている巨人が大きく右腕を振り降ろす。

とはいえ、今更そんな大振りに叩き潰されるあたしではない。

むしろ、その≒ダイダラボッチ≒の右腕に飛び乗り、それを足場に駆け上がる。

狙うははまだ≒ダイダラボッチ≒の核である【紅玉の杏】^{あんず}！

無数の触手はあたしにも迫る。公算射撃の様な触手の弾幕を、しかし、【超感覚】と【超認識】——そして、その有機的結合である【疑似超反応】で、すべて回避する。

最後にはあたしの足場になっている巨人^{ダイダラボッチ}の右腕を振り上げ、あたしを振り落とそうとする。

あたしは苦肉の策で跳躍した。その放物線軌道の先は【紅玉の杏】^{あんず}——【超感覚】に基づき、【超認識】で割り出したのだから、間違いない。

ただし、空中にいる間、あたしは身動きが取れない。こればかりは純然たる物理法則だ。
【疑似超反応】でもどうにもならない。

当然、そんなあたしへ触手が殺到する。あたしに回避の手段はないが、勝算はあった。

【紅玉の杏】よ——選ぶがいい！」

「……！」

「このまま、異形に魂を食らわれるか!? それとも、己の魂の仇を討つか!?’

「……!!」

「承った!!」

杏の言葉は言葉になっていなかったが、十分だった。無数の触手の動きが一斉に鈍ったからだ。

「その異形、あたしが討滅する!!」

あたしは自由落下の中、《天之尾羽張》を真一文字に振り降ろす。

その精霊結晶とやらの刃は、巨人に囚われた【紅玉の杏】を斬り裂いた。

……そして、あたしは逆算して約八メートルの高さから、大地に降り立つ羽目になった。

うろ覚えの五点接地——両足で着地しつつ、体を丸め、転がりながら、脛の外側・尻・背中・肩の五点で衝撃を分散させながら接地させることで、あたしは墜落死を免れていた。

【疑似超反応】がなかったら、絶対に即死だった。

その上で、あたしは《ダイダラボッチ》|| 【紅玉の杏】から、目を離さない。

——これでっ、駄目ならっ……!

その視線の先には燃え盛る炎の神の如く、異形の触手を揺らめかす巨人の姿があった。

「……!!」

「……!!」

あたしの《天之尾羽張》で、その上半身を両断された【紅玉の杏】は、こちらに振り向いた。

次の瞬間、【融解】が始まった。

まるで嘘のように《ダイダラボッチ》の巨体そのものが消え去ったのだった。

数日後――。

あたしたち三人は苦小牧市とまこまいの目前にまで来ていた。

「ここで、お別れだな」

シージンは一人でそう宣言した。

「……名残惜しいわ」

と、これは汀の台詞である。ここまでの道中、シージンは汀ととてもウマが合っていた。元々の気質が似ていたせいだろうか？ それこそ、このあたしをのけものにするぐらい、シージンと汀は仲良くなっていたのだ。

「嬉しい事を言ってくれるね」シージンはくつくつと笑う。「ちなみにアタシはこの国の法律に触れまくりの半生だったんだが、その辺りの罪状を丸ごと帳消しにしてくれるか？」

「無理ね」

汀は瞑目し、淡々と言った。

「だろう？ だから、ここで別れるのがお互いのためさ」

シージンは呵呵と笑う。

そこであたしも気になっていた事を口にだす。

「ねえ、あのさ……」

「なんだ？」

「杏って、どこまで正気だったのかな？」

「……」

シージンはそこで黙り込んだ。

「例えば、冷静に距離を取って、触手で岩でも投げつけていれば、あたしたちに打つ手はなかった」

勿論、これは後知恵というものだ。また、その場合、あたしたちの死体を確認できなくなる。だから、確実に仕留めるために接近してきたという見方もある。

ただ、今にして思えば、杏はやはり色々と杜撰だった。

そして、その理由は……、

「わからん」

シージンはあたしに背を向けてそう言った。それは顔を背けるような動きだった。

「あの人の考えている事は、昔からアタシにはわからなかったんだよ」

そして、シージンは逃げるように去っていった。

別れ際、あの異形の頬が涙で濡れていたように見えたのは、あたしの気のせいだったのか……。

パンと柏手を打つ音がした。汀だ。頭を切り替えるという事らしい。

「さて、まずは病院へ行って、検査ね」

「ええー」

「嫌なら、いつもの赤毛に戻ってみなさい」

「ううー」

そう、この時のあたしは大根の様な白髪になっていた。いつもの人参の様な赤毛は見る影もない。

ダイラポッチ

巨人を倒した後、あたしは極度の疲労感に襲われ、倒れるように眠り込んだ。そして、目覚めると何故かこうなっていたのだ。

「ただの疲労だって。元々、あたしは色素が薄い方だし。赤毛が白髪になるぐらい……」

「あらそう？」

そう言って、汀は野太刀の形に戻った『稲剪』イナキリをあたしの前に掲げた。

「ひっ……」

あたしは身をすくめた。

汀はさらに野太刀を水平にして、鯉口を切った。

「や、やめてよ……」

あたしは目を閉じ、その場にかがみ込んだ。

そう、あれから、あたしはあの『稲剪』イナキリを意識すると吐き気がするようになっていた。見ているだけで、気分が悪くなる程だ。

理由はわからない。しかし、ダイラポッチ巨人を倒した後の疲労感や、自慢の赤毛が白髪になった事と無関係ではあるまい。

「だから、説明したでしょう。それは神経疲労の一種だって。過去には類似の症例も確認されている」

汀は野太刀を背中の中の袋にしまう。すると、途端にあたしの気分も回復する。

「……」

「キャロット、君が病院や検査が嫌いな理由を私は知らないわ。けれど、君自身の身体のことなの。君自身が大切にしてあげなくてどうするの？」

「……はい」

……あれ、あたし、汀の尻に敷かれてない？ あれの『稲剪』イナキリも使い終わったら大人しく返す羽目になっていたし。いや、あたしは『稲剪』イナキリに近寄るだけで神経疲労が起きる以上、汀に任せるしかないのだけど……。

いや、あたしの好みはあたしを無条件で甘やかしてくれる優しい巨乳のお姉さんだ！

推定Bカップで、やたら説教臭い汀みたいな帯刀女子高生ではない!……はずだ。

「わかったのなら、いいわ」

汀はあたしの内心を知ってか知らずか、満足げに微笑む。

「――さ、行きますよ」

そして、汀とあたしは歩き出した。

苦とまこまい小牧市へと――

「了」